

【資料等】

北部モンゴルのタイガ地域に居住するツァータンの生活変化

—観光産業への適応とタイガのゴールドラッシュ—

西村 幹也

筆者は 1995 年より、モンゴル国フブスグル県オランオール郡、ツァガンノール郡に居住するツァータンと呼ばれる人々の中でフィールドワークを続けてきた。ツァータンとはモンゴル北西部・タイガ（針葉樹林帯）地域に居住するトバ民族を指す「トナカイを持つ者」を意味するモンゴル語である。チュルク系言語であるトバ語を母語とする集団で、現在約 50 世帯ほどがトナカイを飼いながらタイガに暮らしている。

社会主義時代に、トナカイ牧民として組織され、生業形態の変化を余儀なくされた彼らであったが、資本主義移行時期を様々な生業戦略の中生き残り、それが近年になって、彼らの移動原理やそのパターンといった、トナカイ飼育の根幹に関わる部分の大きな変化が顕著となってきた。そこで本稿では、ツァータンの土地利用およびトナカイ飼育方法の近年における変化に関して報告、考察することにした。

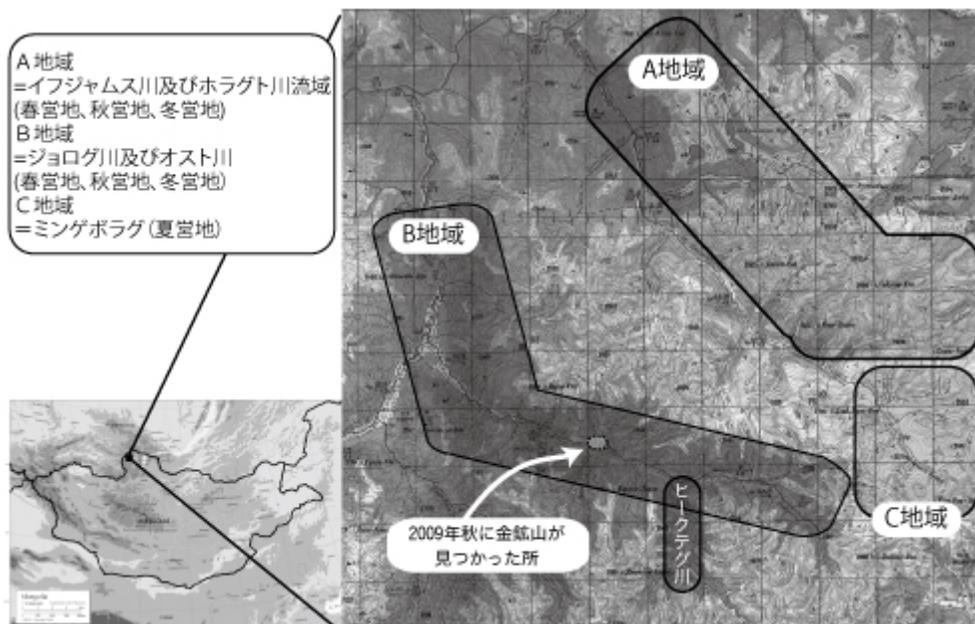
2007 年夏、ミンゲボラグを訪問した。ミンゲボラグは西タイガ地域に居住するすべてのツァータンが夏営地としている場所である。久しぶりの夏営地訪問で驚かされたことは、ここに夏営地を構える世帯数が増えたことであった。若者が結婚し、若いツァータン世帯が増えていた。結婚前は草原地域を生活域としていた子供たちが成人後、夏営地をタイガとしていることは驚きであったが、実際は、夏だけタイガ地域に住み、他の季節は麓の草原地域に住むということを後で知った。若者たちに訊ねると観光客相手にトナカイ角彫刻を売って現金収入を得るのが目的らしい。枯れ角に彫刻を施して売ることになったのである。小さな角彫刻でも 20～50\$になるため、殆ど全ての世帯で制作するに至っていた。どのツァータン世帯においても相当な現金収入が角彫刻販売によって得られるということは、それだけ沢山の外国人旅行客が来るようになったことを示している。

そして、2009 年秋に訪問したときには、この観光客の増加は特に顕著な形で彼らの生活に影響を与えていた。アメリカ人篤志家の資金援助で 2002 年に設立されたツァータン基金の施設として、「ツァーチン センター」が作られ、組織的に観光客の受け入れをするようになったのである。ツァーチンとは、もともとは、「職業としてトナカイを飼育する者」を意味する言葉で、社会主義時代初期によく使われていたが、1970 年代からは新聞紙上などではツァータン (= “トナカイを持つ者”) と表記されることのほうが多くなった。現在ではツァータンという言葉が民族集団を指すようになり、トナカイを持たず草原地域で生活する“元”ツァータンをも含む言葉になっている。そのため、このセンター設立に際し、“タイガに暮らし、トナカイ飼育に実際に、恒常的に拘わる者たち”の組織であることを明示するために、「ツァーチン センター」となったのである。センターでは、観光客の依頼に合わせてタイガ滞在をアレンジし、東西タイガ地域のツァータン世帯に仕事として振り分ける業務を行う。現在、センターのものを合わせて 6 機の無線がタイガ在住世帯に置かれており、それによって連絡を取り合っている。滞在受け入れ世帯は、即座に迎えの馬、もしくはトナカイを送り出すことになっている。一日約 4000 円で馬を貸し出し、収益の 10%がセンターに入るようになっており、その一部は常駐職員の給与となるほか、タイガに住むツァータン世帯が低利子で借りることの出来

る貯金として蓄えられることになっている。センターの運営はタイガでトナカイを飼う世帯たち、すなわちツアーチンによって行われ、いわば、「トナカイ飼育者たちによる、トナカイ飼育者のための組織」ということである。

観光客受け入れを有利にするために、従来の移動パターンを変える世帯は、以前より存在はしていたが、ツアーチンセンターの采配による観光客手配が始まって以降、この傾向は特に顕著になってきている。秋営地決定の際、観光客受け入れがより有利な場所が選ばれるようになったのである。本来であれば、最初の秋営地は夏営地に近い森林部、そして、次の秋営地は夏営地から最も遠い奥まった河川流域、そして、そこから夏営地へ向かって徐々に移動するのがトナカイ飼育にもっとも適した移動であった。これに従えば9月半ば時点の秋営地は最も麓から遠い所にあるはずなのだが、2009年には、麓からわずか半日程度でたどり着ける所に宿営地を構える世帯が殆どとなったのである。彼らは口を揃えて「観光客が来やすいだろう」と言い、無線機を所有する世帯を中心に宿営集団を作り、麓付近に秋営地を構えるようになっている。そして、冬営地はすでに、数年前より諸要因によって麓付近に構えられるようになっていたため、一年を通じて大きな移動が少なくなっているのである。2009年冬には、居住地域には使役用トナカイのみを残し、種オスや雌、子畜を宿営地集団ごとでまとめて、放置放牧し、日常的に管理しないようになっているが、この方法が適切に機能するかどうかは今後の観察が必要だ。

更に彼らの生活変化を促した大きな要因として、観光産業への適応の他に、2004年頃から西タイガ地域で金鉱山が発見されたことによる金鉱夫の異常流入があげられる。これは、ツアーチンに対し、金を掘りあてるといふ新しい現金収入手段を与えるに留まらず、金鉱夫たちの物資輸送請負といった新しい仕事を作り出すことになった。最初の金鉱山はジョログ川中流域に流れ込むヒークテグ川流域に見つかった。この時点でヒークテグ川流域には多い時には200人前後の金鉱夫が作業をしていたが、今はすでに発掘が終了している。続いて近接した hog 川上流域で大きな鉱山が発見された。ここは一夏に2000人前後が訪れるほどの有名な鉱山になった。そして、2009年秋にジョログ川下流域、トルゴ川が流れ込むあたりで金鉱山が見つ



り、同年 12 月には -40°C を下回るような環境にも拘わらず、200 人以上が金掘りに携わるに至っている。しかし、この近年の金鉱夫たちの移動は、西タイガにおけるトナカイ飼育地域を圧迫するようになってきたようだ。

西タイガ地域のツァータン世帯は 1996 年以来、ジョログ川流域とイフジャムス川及びホラグ川流域の上流域を冬、春、夏に、下流域を秋に利用するのが常であった。この 2 つの川の流域を数年ごとに交互に利用し、草地の回復を図り、効率よくトナカイ飼育を行っていた。ところが、ジョログ川流域に金鉱夫が訪れるようになって、トナカイ群の管理が困難になったのである。更に言えば、狩猟採集活動もこの流域では不可能となった。特に冬期は、ジョログ川上流域にある冬営地は、金鉱山への中継地点となり、昼夜の別なく金鉱夫が訪れるようになってしまった。頻繁な人の動きはオオカミを呼び込み、また雪の上に出た道をたどってトナカイ群が散らばってしまいがちであるなど、群管理に支障を来すに至っている。トナカイによる物資輸送請負が始められ、これまでになく大きな利益を生みだし、東タイガ地域のツァータンたちまでもが参入するに至っているが、筆者のインフォーマントはトナカイの疲労度を気にして、近いうちに冬営地を移動させると言っていた。

このような金鉱夫の流入は一時的なものではなく、一年を通じてジョログ川流域でのトナカイ飼育を圧迫することと予想される。結果、トナカイ飼育に適する河川流域を新たに見つけなければならなくなるだろう。しかし、特に夏営地に適した地形は現在の西タイガには無いとも言われており、代換え牧地の確保は非常に難しいらしい。これに対して、1985 年以前に利用していた南のオランオール郡西部のオラータンタイガ地域を利用することも考えられるらしいが、現在、住民登録してある、行政・経済中心地となるツァガンノール郡中心部から極端に離れることは避けたいという希望も強く、問題は非常に深刻である。

観光産業への積極的適応を求めて居住地域を行政・経済中心地に近づけるようになることで予想される過放牧、および金鉱夫の過剰流入による代換え牧地の喪失は、今後、トナカイ飼育のあり方を根本的に変えていく可能性があると考えられている。社会主義崩壊後、様々な努力を重ね、社会適応してきたツァータンたちは、今後、自分たちのアイデンティティの根幹であるトナカイ飼育のあり方の転換期を迎えようとしている。

参考文献他

西村幹也

- 2003 「ポスト社会主義時代におけるトナカイ飼養民ツァータンにおける社会適応ーモンゴル北部タイガ地域の事例」 帯谷知可／林忠行編『スラブ・ユーラシア世界における国家とエスニシティ』(JCAS Occasional Paper no.15) pp.45-58, 2003.
- 2009 「変わりゆくタイガ」『モンゴル情報紙しゃがあ』(NPO法人しゃがあ会報) vol.47: pp.2-21, 2009.
(にしむら・みきや／NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがあ)